

乳用牝犢の經濟性に関する 実態調査

小 林 茂

近年わが国の役肉用牛は、年々減少の一途をたどり、さらに外国における牛肉資源の不足も伝えられ、牛肉価格の暴騰をきたし大きな問題となっている。このような情勢から乳用牝犢の肉利用が増加しつつあり、それにはホワイトビールの生産、若令肥育、廃用牛の肥育等いろいろの形態があるが、ごく最近始められた技術なので、給与飼料や、管理の方法もまちまちで、肥育技術も確立されていないのが現状である。そこで、都下の農家に適した乳牛の肥育技術体系を確立する必要があるので、その実態を調査し、技術上、経営上の問題点を摘出し、普及上の資料を得る目的で本調査を実施した。

1. ホワイトビール生産の 事例調査

1. 調査農家

調査農家は青梅市にあって、労働力は経営主(1)、妻(0.5)、長男(1)である。養蚕と、そさいを中心とした経営であったが、昭和37年から酪農にきりかえた。しかし、飼育頭数が増すにつれて労働力にも無理があり、牛の事故も多く、収益も余りあがらなかったため、資本の回転の早いホワイトビールの生産をとりいれることとした。

2. ホワイトビール生産の実態

(1) 素牛

素牛の体重、価格は第1表のとおりであった。

第1表 肥育素牛

動物No	導入月日	体重	価格	動物No	導入月日	体重	価格
1	3月 5日	46Kg	6,500円	8	4月 9日	50Kg	7,000円
2	7 "	40	5,600	9	9 "	45	6,300
3	8 "	43	6,000	10	10 "	40	5,600
4	11 "	46	6,700	11	11 "	47	6,500
5	13 "	46	6,600	12	12 "	44	6,200
6	15 "	50	7,000	13	13 "	46	6,500
7	18 "	47	6,500	14	14 "	51	7,200
				15	18 "	46	6,500
				16	18 "	48	6,700
				17	19 "	53	7,500
				18	19 "	51	7,200
				19	25 "	50	7,000
平均		45.4Kg	6,415円			47.5Kg	6,683円

(2) 飼育箱

飼育箱は、最初閉鎖式の箱を使用したため、通風がわるいので、開放式をつくり、4月導入した12頭を収容した。

(3)給餌法

飼料はデンカビット人工乳だけを使用した。給与標準にしたがって、1日2回給与した。飲水は全然与えなかった。

(4)飼育労働時間

飼育頭数19頭で、給餌1時間30分、清掃30分、合計2時間であった。

(5)増体成績

3月導入した7頭の増体成績を示すと第2表のとおりであった。

第2表 増体成績

動物No	開始時体重	出荷時体重	所要日数	期間中の増体重	1日平均増体重
1	4.6 Kg	14.0 Kg	115日	9.4 Kg	81.7 g
2	4.0	13.8	117	9.8	83.8
3	4.3	14.3	118	10.0	84.7
4	4.7	13.9	128	9.2	71.9
5	4.6	14.4	131	9.8	74.8
6	4.6	14.2	133	9.6	72.2
7	5.0	14.3	135	9.3	69.0
平均	45.4 Kg	141.3 Kg	125.3日	95.9 Kg	765.3 g

この成績は、輸入人工乳を使用した各地における試験成績の所要日数100日前後、1日平均増体重約1Kgと比較するとかなり悪い。その原因として、次の点が考えられる。

(1)肥育の途中で飼育箱を改造した。

水が自家水道から市営水道に切りかえた。

(2)哺乳器をとりつける高さをかえた。等の飼育環境の変化と、清掃が充分でないで、アンモニアガスが充満して、子牛の健康と発育を阻害した。また肥育の後期が梅雨期にあたり、飼料の摂取状態がよくなかったためと思われる。

(6)飼料消費量と要求率7頭平均の飼料の消費量と要求率は第3表のとおりであった。

第3表 飼料消費率と要求率

増体重	飼料消費量	要求率
95.6 Kg	164 Kg	1.71

(7)出荷

ホワイトビールの生産で一番問題になるのは、生産物の出荷である。

即ち、一般の食肉業者は、ホワイトビールについての知識に乏しく、普通に食肉市場へ出すと、スモールと同じ単価が、それよりやや、高い程度で取り引きされる。

したがって生産を始める前に、業者とはつきりした契約を結んでおかなければならない。

この調査例でも契約があいまいであったので、3月導入の7頭は、ホワイトビールとして出荷することができたが、残りの12頭は引取り手がなく、若令肥育の素牛として自家で育成することとした。

(8)屠体成績

6月27日に屠殺した7頭の屠体成績は第4表のとおりであった。

第4表 屠体成績

屠殺前体重	枝肉重量	枝肉歩留	枝肉単価
140Kg	70Kg		550円
138	71		
143	74		
139	70		
144	75		
142	73		
143	73		
平均141Kg	72Kg	51.2%	550円

(9)収支計算

6月27日に出荷した7頭について、収入支出を計算すると第5表のとおりであった。

第5表 収支計算

項目	金額	備考	項目	金額	備考
収入	278,300円		支出		
ホワイトビール 販売代金	278,300	枝肉1Kg 550円 506Kg	飼料費	177,940円	1Kg 155円 1,148Kg
			素牛代	44,900	生体重1Kg当り 140円
			その他	4,900	.7頭分
			計	227,740	PG代 ロープ 人工哺乳器 其他 円 1頭 700
差引	50,560	1頭当の所得	7,223	1日当の所得	403 (50560÷125.3)

1頭当りの所得は、7,223円であったが、これは最初の目標1万円に比べて、はるかに少なかった。

しかし、7頭を1日約40分で管理し、肥育成績があまりよくわからなかったにもかかわらず1日当り403円の所得があったということは、販売ルートさえ確立していれば、ホワイトビールの生産は他に比較して有利といえるだろう。

3. ホワイトビール生産上の問題点

以上個別農家におけるホワイトビール生産の実例を紹介したが、わが国の畜産の新しい分野でもあり、技術的、経営的にもいろいろと問題点があると思われる。個別農家が副業として、このホワイトビールの生産をとり入れることが適当であるかどうか。結論からいうと、不適当な要素が多いと思われる。その原因として次のことが考えられる。

(1)酪農家が自家産の雄子牛を素牛として肥育する場合1年間に生産される雄子牛の数はわづかであり、これを特別に手間をかけて肥育してもその収益はわずかなものである。

(2)ホワイトビールの生産は、短期肥育なので資本の回転が早いとはいっても、夏期と冬期間は、特別に冷暖房完備の畜舎でも作らないかぎり、発育成績もわるくなるので、この期間をさけるようになり、したがって資本回転率もわるくなる。

(3)生産物の出荷については、生産を始める前に、業者としっかりした契約を結んでおかなければならないが、個々の農家が業者と契約を結ぶということはなかなか難しい。

以上のように現在の段階では、個々の農家が自分の家の庭先でホワイトビールの生産を行なうということはまだ適当ではないと思われる。